「日々の理科」（第 1375 号） 2018（H30),-4,12

「カラスノエンドウを探究する（３）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員
田中　千尋　Chihiro Tanaka

腊葉標本（さくようひょうほん＝押し花、押し葉）作りを目的とした植物採集の場合、植物体ができるだけ痛まないように持ち帰る必要がある。

かつては、写真のような「胴乱（どうらん）」という道具を使った。通便受けにさげ紐をつけたようなものだ。私も高校生の時、宮益坂にあった「志賀昆虫社」で買い求めた記憶がある。かつて理科室にも、戦前のものと思しき古い胴乱が十個ぐらいあったのだが、全く使っていなかったので処分してしまった。今新品で買うと１万円近くする。惜しいことをしてしまった。

こちらは「野冊（やさつ）」という道具である。竹を編んで作った網を、２枚組み合わせてある。その間に新聞紙を挟み、野外でその場で腊葉標本を作るためのものだ。大きさも新聞紙半折に合わせてある。竹の弾力で、両側から適度に圧力がかかるのである。野冊もかつて理科室で見かけたことがあるが、現在はない。これも今買えば１枚４～５千円はする。

今回は野冊のかわりに、厚紙を使うことにした。印刷室の隅に「使い道のない紙です。ご自由にお使いください」と表示があり、厚手の上質紙のような紙が大量に積んであった。これは「天の恵み」とばかり、千枚もどもらっておいたのだ。

その紙を２枚重ねて、重ねた状態で半分に折り、氏名を書いて、野外に持たせたのである。子どもたちは採集したカラスノエンドウの形を整えて、その場で紙に挟んでいた。「簡易版野冊」といえるだろう。出来上がりの標本の大きさがわかるので良い方法だと思う。特に、短時間で萎れてしまうカラスノエンドウのような植物には適していると思う。

標本は、挟んだ状態のまま、教室に持ち帰る。その後もう一度形を整えて、全員分を重ねる。そのままでは、乾燥後にしわの寄った標本になってしまうので、上に重石をのせる。雑誌を何冊か重ねる程度でも良い。１週間ほど置くと、かなり美しい腊葉標本が出来上がっているはずだ。それをじっくり観察させ、花が咲いて果実に育つ様子を理解させたいと思っている。